

高校卒業まで振り返って気付いたこと

第7期生 中川 美穂

私たち7期生が小野ゼミに入ったのは、2009年3月末。今このエッセイを執筆しているのは、2011年2月（編集委員の方々、提出が遅くなって申し訳ありません）。早いもので、2年が経とうとしている。

入ゼミからは2年だが、高校卒業、大学入学からは4年経ったわけである。高校卒業時も、部活で卒業エッセイを書いたことを思い出し、部屋を探し回って引っ張り出してきた。もうちょっと丁寧に扱うべきだったなと反省するような状態で発見された。小野ゼミでは本当にたくさんの能力を培うことができたと思うが、整理整頓の能力は向上しなかったのが残念である。

さて、高校3年時の私が卒業に際し執筆した文章は、まるで卒業とは関係ない内容であった。クラリネットの童謡に関する自分の疑問と自分なりの解釈を延々と書いており、部活どころか学生生活にまったく触れずに終わっていた。なぜこの文章を残して卒業したのか自分でもわからないが、恐らく、他人と内容が被るのが嫌だったこと、そして卒業でありがちな感動的な内容では規定の分量を埋めきる自信が無かったのだと思う。

しかし、思えばこの頃から既に私の「なんで？」は始まっていたのだろう。同期の仲間、特に英論メンバーはよく知っていることと思うが、私はとにかく自分が納得するまで議論する性格である。プレゼンも上手くはなく日本語力も英語力も無いに等しい私が小野ゼミで2年間やってこられたのは、異常に夜に強い体質とこの追究する性格があったからではないかと思う。逆にそんな私が三田キャンパスでの2年間を過ごすにあたって、小野ゼミは最適な環境であったとも思う。グループワークでも簡単には譲らない私の存在は厄介だったことも多かったことと思うが、そこで互いに妥協することなく話し合うことができたのは、単純にすごく楽しかった。入ゼミ当初、ドトールのケースが始まったばかりの頃は、同期の私の強さに、今後やっていけるのか不安にもなった。今思えばドトールのケースの時のチームなんて同期の中でおとなしいメンバーばかりだったわけだが、それまで本気で意見をぶつけあった経験の無かった私が怖気づくには十分だった。あの頃の緊張と不安の混じった感情は今でも覚えている。だがそんな不安を覚えていたのも本当に最初だけだった。家族より長い時間を一緒に過ごしているのだから、打ち解けるのも早かった。2009年4月の私は、まさかこの同期と夏休みに海外旅行するとは思ってもみなかった。

2年生のゼミ選びの時、私は本登録の前日まで第1志望のゼミを決めきれないでいた。前述の通りの考え抜く性格がここでも発揮されていたわけである。単に決断力が弱いだけと言ってもしまえばそれまでだが、悩みに悩んで選んだ道は、足場がしっかりしていると思う。2年間、辛いと思ったことはあったが辞めたいと思ったことは一度も無かった。元々後悔する性格ではないので、どこのゼミに入っていたとしてもきっとそれなりに楽しく2年間終えていたのだろうと思う。しかし高校3年次の自分の文章を読んで、自分はゼミ選びに際し最適な道を選択したのだなあと感じている。いつか機会があれば、大切にしていたクラリネットだったのに、なぜ音がすべて出なくなるまで気付かなかったのか、について話し合っほしい。